平成二十三年度 全国大会式次第

平成二十三年五月二十三日（月曜日）
神戸ポートピアホテル 南館四階「レヴァンテ」

司会進行役　事務局　金野 和夫

一、開会の辞　　幹事長　安東　浄
一、挨拶　　太陽鉱工社長　鈴木一誠
一、会務報告　　幹事　松下重男
一、乾杯
宴
テーブルスピーチ
一、閉会の辞　　幹事　柳田辰巳

以上

平成二十三年度 全国大会御出席者名簿

（敬称略）

平成二十三年五月二十三日(月曜日)正午より
神戸ポートピアホテル
南館四階「レヴァンテ」

安東　浄　松下重男　井上常子
池田泰雄　柳田辰巳　大塚　融
今村三郎　東條佳子　澤田勝行
扇谷廸宏　貴答恵子　金井　明
扇谷　睦　藤野欽司（事務局）
大谷淳子　松本一郎　金野和夫
鈴木一誠　中村　裕　貴答祥子
鈴木孝子　矢倉愼吾
楠瀬正明　瀬下　猛

以上　二十四名

金子直吉さんの古里、土佐に顕彰碑建立される

高知県産業振興推進部
地域づくり支援課
地域支援企画員　西森　文明

金子直吉翁の顕彰碑除幕式について

去る平成二十三年十一月十四日、高知市内の七つのロータリークラブと金子直吉ゆかりの仁淀ロータリークラブで組織する〝八ロータリークラブ（以下、「RC」という）〟が高知市筆山の金子家墓地内に金子直吉翁の偉業を称え、顕彰碑を建立につき除幕式を行いました。

この顕彰碑建立は、RCが計画したもので、会員約四百名から六十万円の寄付を集めて建立しました。高さ約百五十センチ、幅約七十センチで「丁稚奉公から身を起こし（略）天性の商才発揮し、三十業種、六十余の企業を率いる一大総合商社を築き上げた」「私財を投じ多くの人材を育成、自らは資性高潔、識見高邁の士として後世にその名を残す」と碑文に刻みました。

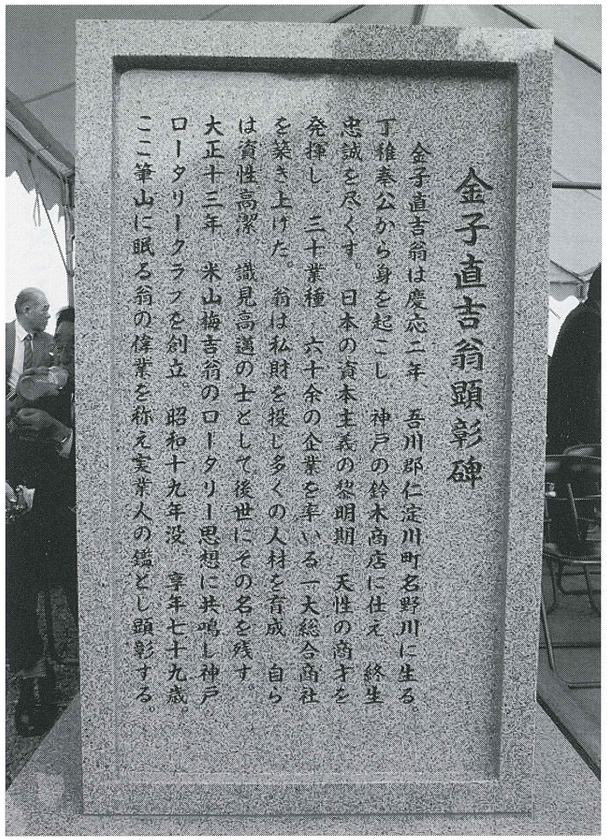
顕彰碑除幕式には、RC関係者そして金子家ご子孫の方々ら約四十名が参加し、発起人代表・掛水俊彦氏は「高知県民の間では金子直吉翁の偉大さがほとんど知られず、歯がゆい思いをしてきた。直吉翁が正当な評価をされ、後世に名が残ることを願う」とあいさつしました。その他、鈴木商店関係企業（帝人、神戸製鋼所、双日）からも祝電も頂き、同会場で披露し、また高知県内のマスコミ各社の取材もあり盛大に執り行われました。

顕彰碑建立までの経過について

今回のこの動きの原動力となったのは、ほかでもない、高知市在住でRC会員（元・高知銀行専務取締役）の吉原強氏の精力的な金子直吉顕彰活動があったればこそ、RC関係者の中でこの金子直吉顕彰碑の建立へ至ったのであります。

吉原氏は昭和四十年代後半の東京勤務の銀行マン時代に、同じ土佐の知人で日本銀行監事・竹村直己氏から「君は金子直吉さんを知っているか？」と聞かれ、その時、鈴木商店のことは知っていたが、金子直吉翁のことは知らなかったが、それをきっかけに城山三郎氏の著書「鼠」により鈴木商店・金子直吉を知ることとなり、産業黎明期の明治大正時代に鈴木商店での偉業や私財を投じての人材育成に心を打たれ、以来、RC仲間の掛水氏ら数人とともに、神戸ロータリークラブの創始者でもある金子直吉翁の研究とその顕彰活動を行うことを目標として活動してきました。

特に、平成二十一年七月三十一日高知新聞（次頁参照）への投稿記事「所感雑感／金子直吉翁に学ぶ」により高知県内にも広く知られるようになり、金子直吉の生まれ故郷の高知県吾川郡仁淀川町に駐在している高知県産業振興部地域づくり支援課所属の地域支援企画員・西森文明氏との連携がはじまり、RCの各会合や仁淀川町、高知市などでの金子直吉講演会などを行い、顕彰活動をこまやかに実施し今に継続しています。



今後について

この高知県においても、鈴木商店で活躍した金子直吉翁をより多くの人に知ってもらうための顕彰活動をますます活発にしていくとともに、〝金子直吉の偉業をたたえる会〟（仮称）の設立を目指し、貴会（辰巳会）や鈴木商店系列の企業、その他作家及び研究者の皆様方とも連携をさせていただき、土佐の偉人・坂本龍馬のなしえなかった世界貿易を行った鈴木商店・金子直吉翁の偉業を広く今の若い人たちや企業人に伝えていきたいと考えています。

所感雑感

金子直吉翁に学ぶ

元高知銀行専務　吉原　強

土佐出身の企業家、砂糖、樟脳、神戸製鋼所、帝人、石川島播磨重工業、昭和石油、三井東圧化学、日本製粉、日本冶金、豊年製油、日商岩井、鈴木商店――と言えば誰の名が浮かぶだろうか。正解は「金子直吉」（1866～1944年）である。

金子直吉翁は21歳の時土佐を離れ、神戸の鈴木商店の店員として採用された。以来番頭として、私利私欲無く、生涯主家の安泰のみを念じ事業の拡張に邁進。日本の資本主義の黎明期、天性の商才を発揮し総合商社の源流を築き上げた。

鈴木商店はわずか30余年の間に、日本は元より世界に羽ばたく大商社となり、全盛期には三井、三菱と並ぶまでに急成長した。世界の商品相場の動きをどこよりも早く入手、内外輸出入取引から三国間貿易を組み込むという多角化を成し遂げていた。

貿易商に留まらない、旺盛な起業家精神の持ち主だったことにも驚く。商社としての利益を次々と事業に投資。製鉄、造船、海運、ビール、人絹、毛織、製粉、製油、ゴム、鉱工業など、関与した企業数は65社に及んだ。

その後第1次世界大戦の不況のあおりを受け、1927年、昭和恐慌と共に鈴木商店は破綻した。しかし社業精神を引き継ぐ多くの企業群、有能な人材は、今日も日本経済の重要な地位を占めている。

金子直吉翁は大商人であって大工業家であり、教育者でもあった。見込みのある若者を見つけると、自宅に住まわせ、優秀な者は学費を負担して大学まで進学させた。後々の企業群を支える仕事人が次々と育てられた。

大正5年、渋沢栄一翁が神戸を訪れた時のこと、迎えの席で司会者が「この金子は、あらゆる商品について、何から何まで知らない物はない、まさに天下の生き字引です」と紹介したという話が残っている。藤原銀次郎翁は「金子直吉は徳の人、智の人、勇の人」だと評している。

金子翁の「商売は虚業ではない、実業だよ」「商売人とは物を売る前に、物を評価する人だ」などの言葉が今に残っている。

翁の事業追究の志は、近代資本主義精神そのものと言える。そのルーツはどこにあるのだろうか。翁は土佐の山間、仁淀川の上流、名野川で生まれる。小学校へ行くこともままならず、高知市に出て転々と丁稚奉公をした。

15歳の時、傍士質店の奉公人となったことが運命的出会いとなった。蔵には質草の本が山と積まれていた。中国古典、法律経済、歴史、小説など、あらゆる本を夜を徹して読破したという。翁の人格形成の場を垣間見る思いがする。唯一の趣味は俳句だった。2千余の句を残している。城山三郎の「鼠」、玉岡かおるの「お家さん」は、翁の生き様が浮き彫りされた興味深い作品である。

日本経済が未成熟だったこの時期、翁は東洋思想の上に身を置き、自分の職業を天職として、使命感を全うした。くしくも欧米では、マックス・ウェーバーが1905年「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という名著を世に送っている。東西の近代資本主義の精神を比較する時、真に興味深いテーマでもある。

百年に一度の金融危機で資本主義は変わると言われている。実物経済の時代を迎え、偉大な先人の業績を顕彰することは県民として誇りに思う。「金子直吉翁をたたえる会」の設立を考えている。

（高知市桜馬場）